

現代の住宅に関わる主要な批判のひとつは、すでに標準家族と呼ばれる世帯はメインリテイにすぎないのに、それを想定した『七五m・3LDK』に代表されるような画一的な間取りが相変わらず量産されているということである。それはまた、住宅が商品経済の中で記号化し、欲望の対象となっているという批判でもある。

確かに七五m・3LDKの呪縛はいまだに強烈だ。分譲マンションの仕事をするとびに感じる。間口六・五〜七・五メートル奥行き一〇〜一メートル、階高三メートルで、しかも三寝室は確保することという条件がつけられて、「思い切った提案を」といわれても、啞然とするばかりである。ただし、画一的であることが必ずしも悪いかといえは、そうともいえない。特に集合住宅のプランなら、スタンダードがあつて、むしろ当たり前であり、それが住み替えやすさを保障するという側面もある。それでも、あのNHKですら、3LDKはまきういらな(「NHK生活

## 住まいという親密圏の再構築にむけて

篠原 聡子

Written by Satoko Shinohara

ほつと千二シクシリーズ戦後六〇年目のメッセージ。3LDKはまきういらな(「二〇〇五年五月三一日放送)という番組をいくつか見ました。いたい、七五m・3LDKの何が悪いのだからか?

集合住宅において、間口はすなわち性能なのである。「ワイドスパン」というのがマンションの売りになるのは、それが担保する居住性が如何に大きいかをもの語っている。近頃、集合住宅の調査によくソウルに行くのだが、間口による居住性の違いを実感する。ソウルの一般的な家族世帯用の集合住宅の間取りは九〇m程度が標準で、かつ圧倒的に階段室型が主流である。階段室型では、両妻面からの十分な採光が可能だから、間口の倍の採光部がとれて、住居としての居住性は片廊下型に比べて、ぐっと高い。その階段室のそれぞれにエレベーターがついてワンフロア、二戸でエレベーター一台という、日本の状況から考えたらなんとも贅沢な構成になっている。

したがって日本の七五m・3LDKは、その間取りの何たるかを問う以前に、箱としての性能が極めて貧しいといえる。プライベートを重視すれば、片廊下型の構成では、おのずと片廊下下面して閉鎖的になるから、一面の間口分しか採光を得ることができない。この箱の閉鎖性は、単に採光や通風といった建築的な制約を意味しているのではない。その閉鎖性は、他住戸との関係、箱の外側との関係の切断なのである。そして、その性能の低さにも関わらず、依然として七五m・3LDKが、同じスタンダードのまま自己増殖的に増え続けている。その理由は、その閉鎖性を肯定するマーケットの指向があつた証明でもある。

## ソウルから見えた

## 日本の住まいの意味

私は、かつて住居の基本的な性能を「接続と隔離」として説明したことがある。「関係を選択する」「新建築住宅指導二〇〇六年六月号」が、戦後の住宅の命題としては、その基本的な性能のうちの「隔離」に重心がおかれてきた。それは家族という親密圏、「具体的な他者への配慮／関心をメディアとする、ある程度持続可能な関係」と齋藤純一は定義付けている。『親密圏のポリテクス』齋藤純一編。同書の中で齋藤は、親密圏が、必ずしも従来の家族には限らないこと、その意味では、人間が生活していく上で、親密圏が重要であることとともに、ジェンダーや家長長制に制約された家族の解体なら、新たな親密圏の再構築の可能性を開くものとして、むしろ歓迎されるべきものとしている(に他のルールを持ち込まないという意思の現れだった。

他のルールとは、封建性の論理や近隣共同体の因習などである。それらの象徴として批判された「家」制度の「家」が、基本的には、日常的で具体的な他者との関係性の上に成り立ち、しかも他の中間集団のような対等な立場の集団というより、子供や高齢者などの弱者を包含する非対称的な関係性を内包すると

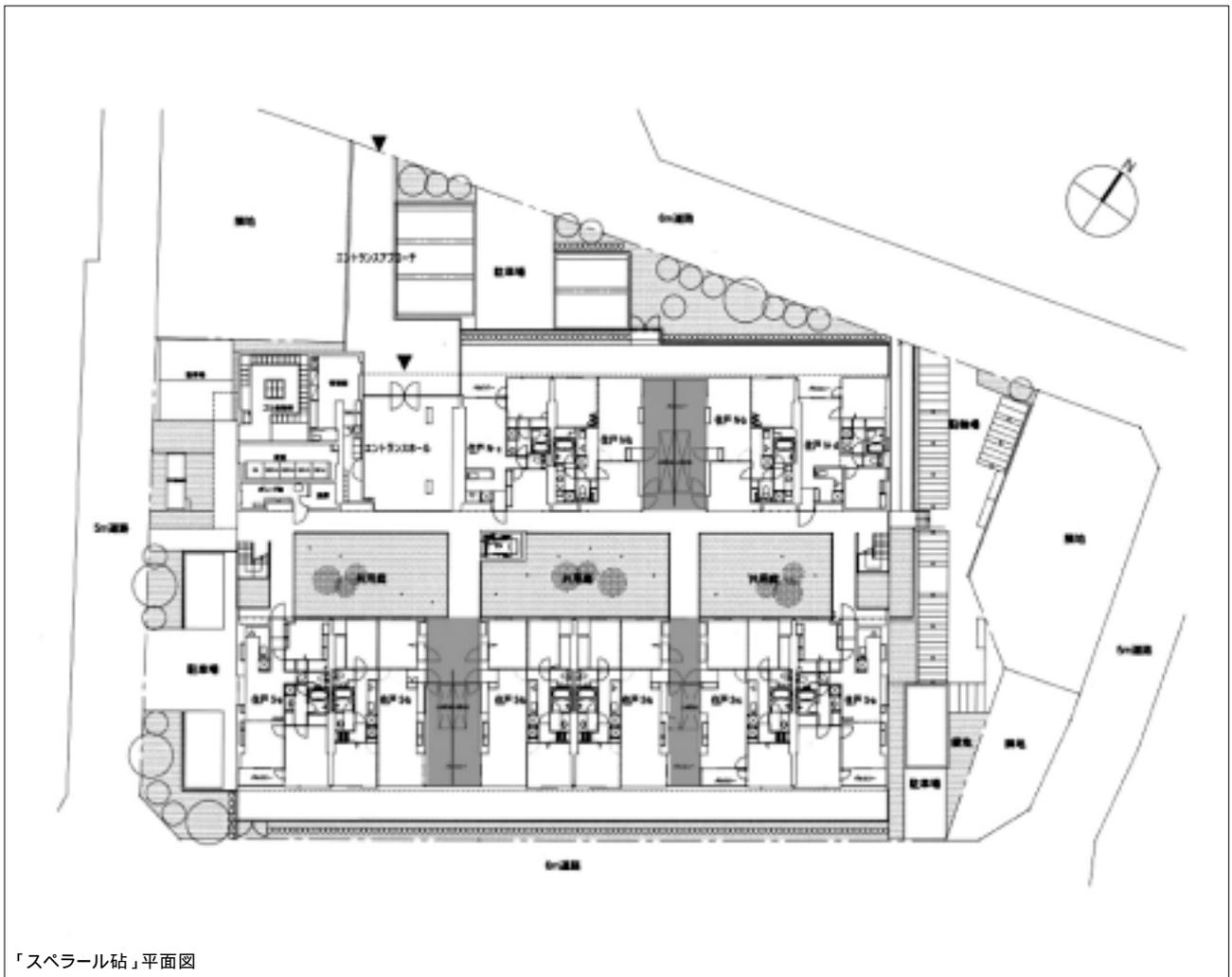
いう意味では、親密圏という領域にありながらも共同体内の中への接続機能をもっていた点で、戦後の家族とは対称的である。もちろん日本の伝統的な「家」を肯定するものではない。そのシステムの維持には、ジェンダーや階層など抑圧的な構造が不可欠であったのだから。とくにその近隣との切断ともいえる家族の隔離は、住居という建築的装置を通して実施、もしくは強化されたといつてよいだろう。前述した韓国ソウルの調査において、むしろ日本の住まいの状況の特殊性が認識されてきた。

もともと、それ以前から、研究室で東京の赤羽台団地の共用空間とそれに関わるネットワーカーの調査をしており、その海外編という意味合いでソウルに出かけた。韓国は公的機関(大韓住宅公社)が、住宅供給において重要な役割を担っている点で、日本住宅公団が主導したある時期まで日本の体制と似ていたし、もちろん経済的な環境の近さという点でも比較の可能な対象だろうと予想できた。

ところが、ソウルの集合住宅団地には、児童公園のような屋外施設はあるが、いわゆる集会所のような多目的な共用空間をみつけることができなかった。日本の団地では、当然集会所で行われることを前提としている。婦人会や維持管理のための会議などは、もっぱら個人の住戸で行われるので、とくに集会所の必要がなかったようである(ただし、「老人亭」と呼ばれる六五歳以上の高齢者が居場所的に使用する空間は、どこの団地にも必ず設置されており、これは朴大統領の時から、その設置が

義務付けられている。この「老人亭」については後述する)。韓国における核家族化、少子化などは、その進行の時期はずれるが、ほぼ現在では日本と同じような問題を抱えているといつてもよいだろう。少子化においては、もはや韓国の方が先をいっている。それでも、住宅が「接続」の機能をまだ保持しているという点では大きく異なる。

韓国の集合住宅の一般的な間取りは、階段室からいきなりリビングにはいり、南側のバルコニー付の開口部に向かって広がっている。バルコニーは先端の手すりにサッシが後付けで設置されていてサンルームのようになっていて。その反対側に、ほとんどリビングと一体になったダイニングルームがあり、その奥にキッチンという構成である。玄関ドアを開けるなり、そのあたりは一望できてしまう。私たちがインタビュースタッフにでかけたお宅では、妻が自宅で塾をしているということもあって、日常生活に関わるネットワークについて聞きたいとお願ひしておいたら、七、八人の奥さんたちを呼んでおいてくれた。そのリビング・ダイニング空間が、さながら集会所のようになって、皆で私たちのインタビューに答えてくれた。ソウルの住宅も、伝統的なものに比べれば私的領域が拡大し、接続の機能は縮小したといわれている。しかし、現時点でいえば、まだ日本ほどには極端な他者の排除を感じない。アジアの集合住宅団地に、いろいろ出かけてみたが、最も住宅内に入れてもらうのが難しいのは、やはり日本である。



「スベラール砧」平面図

## 住まいから他者を 排除した集会所

日本に話をもとせば、私たちが、団地空間で当たりまえのように考えていた多目的な集会所の意味は、計画者の「コンセンサス」としては、「ミニミニ」の育成のためということのだが、同時に供給された住戸の「プラン」と重ねてみると、また別の側面が見えてくる。

多目的な集会所の設置は、すなわち、住宅から近所という生活圏を共有する他者と出会う機会を切り離したということともいえる。戦後の住宅難の時代に、集合住宅団地という形で大量供給された住まいが、集会所の設置という形で、住まいから公的な領域を分離して、住まいを私的領域に純化したものだったということの影響は大きかったと思える。核家族化の進行や、それにもなう住まいの私的領域化は、戦前すでに大きな流れとなっていた(市場経済の進展は、家族を生産から切り離し、家のようなシステムを解体していく。それは住まいから公領域の必然性を希薄にする)としても、現時点では多くの問題を共有しているソウル、韓国でも現在少子化とともに世帯員数の少数化は急激に進行している(と比較するとき、戦後の日本の状況には、それ以前と比べて大きな断絶があるように思える。住居計画においても浜口ミホ

『日本住宅の封建性』に代表されるように、「天皇制」や「家長制」は徹底的に批判され、住宅の中(ほとんど家族の中と同義だと思っただが)から、愛情に基づいた家族というルール以外は排除されることになった。前述したように、否定されたのは「天皇制」や「家長制」というルールだったわけだが、結果として排除されたのはそれだけではなかったのではなかったか。

土間、縁側のよつな外部との中間的な空間、玄関や応接間、床の間付の和室といった家族のスタイルやアイデンティティを示すような接客空間、襖や障子で仕切られた機能が未分化なスペースな空間は、過去に拘束されない、近代的な小家族の住まいとして相応しくないものとして排除されたのである。その結果、閉ざされた住まいによって、家族は様々な中間集団との接続のコードを失ったのである。その時点で、その選択に意味がなかったというつもりはないし、少なくとも住まいがそのような国家的なイデオロギーと密接に結びついたものであるという指摘がなされたことは、当時としては画期的であったといえる。また、限られた平面の中での居住性の確保という意味では、合理的な選択であったともいえるだろう。それでもなお、その閉じられた小さな箱が、家族という親密圏のリスクを高めたのではないかという懸念は拭い去れない。そして本来、「封建性」や「家長制」に対する否定として、家族以外のルールを排除したつもりは、その孤立によつてむしろ家族の社会(より大きな秩序)に対する従属性や補完性を高める装置として働いたのではなかったか。

経済的には住宅取得という目的のために三〇年ローンによつて、市場経済の中に組み込まれ(集合住宅の七五〇、LDKの平面が硬直的に新たな建築的試みに対して閉ざされている背景にはこの三〇年ローンが大いに関係している)近隣や親族ネットワークから切り離されることによつて、より大きな制度の中に無批判に組み込まれていったのではなかったか。

### いかに住むかは いかに生きるかという戦略

前節での問題を解決するためには、安定的である程度継続的な親密圏が再構築される必要がある。その空間的な装置として住まいを考えるなら、二つのことを考える必要があると思う。

一つは「住まいを開く」ということ、本来住まいが持っていた接続の空間を取り戻すことである。これはすでに建築の計画者から様々な試みが提出さ

れている。「東雲キャナルコート」の山本理顕棟における中廊下に向かつて透明な大開口をもつ住戸も、多くのそうした試みの端的な事例としてあげることができるし、私たちの計画した「スベラル砧」における「通り庭」も、如何に外部との接続の可能性をひろげるかということがテーマだった。

ところが、この計画者の「住まいを開く」提案がなかなか効果的に機能していないのも現実である。こうした試みが効果的に機能するためには、何に向かつて開くのかという具体的なイメージが必要なのである。かつての住まいにおける中間的な領域も、地縁や親族集団という具体的な中間集団に対して開かれていたのであって、無差別に開放されていたわけではない。親密圏の



「スベラル砧」に設けられた「通り庭」

再構築は、その他の中間集団の再構築と連携してはからなくてはならない。建築としての住まいは、そのリアルな関係を拾い上げるものである必要があるだろう。S O H O による仕事を媒介とした関係、子育てを共有するネットワーク、介護をサポートするNPOなど、すでに日常生活を維持していくための中間集団は萌芽的なものも含めて、かなり見出すことができるはずである。

もう一つのテーマは、親密圏からの退出の自由である。これは、住まいという建築がコンタクトすることは難しい問題であるが、前出のソウルの集合住宅団地に設けられた「老人亭」の存在は、ある可能性を示唆しているように思える。そこを利用する高齢者の多くは、朝食を自宅で済ませると、そこにやってくる、夕方まで花札や麻雀などのゲームをしたり、体操をしたり、昼食をつくったり、習字をしたり……つまり自宅に居るようになって過ごすのである。そこは、公共的に設置された空間ではあるが、現実には外部化された住まいなのであり、親密圏的な領域といつことができる。家族規範がいまだに非常に強い韓国の社会でも、個人の析出は家族関係に変化を与えている。特に老人亭については、単身居住の高齢者にとっての居場所としての意味



「スベラル砧」の全景

だけでなく、むしろ家族(主として息子夫婦)と暮らしている高齢者にとって、あるいはその家族にとって重要な場所になっている。その微妙な関係に対して、つまり規範と実態の緩衝的な場所として作用しているのである。住まいが重層的にあることで対処できる問題もあるという事例だといえるだろう。

住まいは、そこに住まう人間に、その場所に対する帰属のし方を強いるが、それはまた、外部の集団といかに接続するかという可能性の装置でもあるということである。家族やそれに同調した住まいが自明のものでない現在、いかに住むかはいかに生きるかという戦略でもある。

CEL

□ 篠原 聡子(しのはら・さとこ)

日本女子大学住居学科助教授、建築家、空間研究所代表。一九五八年千葉生まれ。八一年日本女子大学住居学科卒業、八三年日本女子大学大学院修了。八三年香山アトリ工勤務、八六年空間研究所設立。九七年日本女子大学住居学科専任講師就任、二〇〇一年から現職。著書は、『変わる家族と変わる住まい』(彰国社)、『生活文化論』(共著、朝倉書店)など。